

「忘れないように」と言って渡してくれた写真二枚が見つかったため、MPがこの二枚の写真をどう理解したか分からないが、その後約一年位、私宅に来る手紙は全部開封して検閲してあった。いわゆる共産党系の要注意人物とみなされていたのである。

書いてきたことに記憶違いもあるかもしれないが、シベリアでの地獄のような生活をさせられたことは忘れることができない。

帰国できた幸せと、いまだに凍土の中に眠っておられる戦友に対する慰霊の気持ちは忘れないつもりだ。

## 抑留生活の記憶

愛知県 永井 鎬

愛知県東春日井郡勝川町柏井下条厚字股で、大

正十（一九二一）年五月五日生まれる。

昭和十一（一九三六）年三月三十一日、味美小  
学校高等科卒業。

卒業後家事農業に従事しながら大企業に就職し、家族ともども銃後の護りに専念した。

昭和十六年度の徴兵検査で合格し、昭和十七年七月一日、航空浜松中部第七五部隊教育隊に入隊。

昭和十七年十一月十日、満州の首都新京（長春）の南領の満州第二氣象連隊八三九七部隊に転属、氣象班勤務となる。

ソ連軍侵攻時は牡丹江の服務から新京に転属を命ぜられた時で、新京では、当時の状況下では日本軍の活動は余りよくなく、近いうちにソ連の動きがはつきりする、各自一層努力、任務遂行を厳しく伝えられていた。

新京では、後の反撃地点として奉天（瀋陽）を横の一線で戦える状態を作るべく、移動を計画していた。

八月十四日、部隊所属の送信所を爆破すること

になり、爆破地点に向かう時は橋の警備をしていた満州兵は快く通過させてくれたが、爆破終了後同地点を通過しようとしたところ、満州兵は我々に銃口を向けて通行させなかった。この時点でポツダム宣言がすでに満州兵に分かつておつたのである。

八月十五日、部隊は奉天に移動で出発した。出発当日は部隊の周辺は中国人民でいっぱい、我々部隊が出発のため衛門を出ると同時になだれ込み状態で部隊内に侵入し、部隊内に残されている糧秣その他の物品が略奪された。

終戦の詔勅は部隊が奉天に移動中の道中で聞いたが、何とも言えぬ憤りが走り、身体の中から力が抜けるのが感じられた。行軍途中、公主嶺の飛行場近くで田の中にソ連兵の死体が数体見つけれ、情報でこの地で戦争があったと聞く。公主嶺の市街地に集結した部隊はソ連軍の指令を受け武装解除され、銃・帯剣等を出して運命の一線を越えた。

武装解除された人員は約八百〜千人位であったと思う。武装解除されても部隊を解散することなく団体行動で処理することとなった。武装解除を受けた場所は他の部隊もおり、多くの人がいた。

武装解除後の約十日間位は、ソ連よりの指示で使役労働をさせられ、糧秣受領が主な仕事であった。

部隊で行動し、東京ダモイと言われて貨車に乗り、ジャムスを通過し国境の街黒河に着いた。黒河よりアムールを渡ってソ連のブラゴエシチェンスクに着き、ここで更に輸送貨車に詰め込まれて、東に行くか、西に行くかと互いに心配をこめて語り合い、運命の一点を心待ちにした。この間の生活状況は特別に変わったことはなかった。

東京ダモイと騙され上下二段の有蓋貨物車に詰め込まれて動き出し、夜が明け眺めればまったく野原の真ん中を走り、西に向かつて走っている……あつと落胆した。これから長い旅、苦しい旅が始まると同僚と話し合い、帰るまで元気に頑張

ろうと再度手を握り合った。

輸送期間の貨車生活は、上下二段に仕切られて立つこともできず、中腰の姿勢である。中央に暖をとるストーブがあつたか、その所在もはつきり覚えていない。貨車の屋上にはロシア兵がマンドリン銃を構えて歩哨に立ち、異変があれば発砲と目を光らせ警戒している。歩哨は年齢が若く、二十歳前後の年齢に見える。こんな若造めと思いたくなる感じである。

一定の区間を走り貨車が停まれば、一斉に歩哨に氣を使いながら大小便の放列が始まる。実に情けない状況である。停止した駅では地方の者が日本人珍しやと寄つて来て、身につけている物、特に時計、万年筆をくれとせがむが、パンと交換という状況である。いかに物が欠乏しているか、貧しい生活が目につく。ソ連共産主義帝国の悪政が感じられる。中でも十二歳前後の子供達は非常にすばしこくて、我々の物を盗んで行く。ちょうど針金の太い物で、先を曲げてそれで貨車の中の物

品を引っかけ盗む。泥棒根性の現れで、お互いに注意することを申し合わせた。沿線の住民の様子は非常にやつれ、活気もなく、生きる氣力が感じられない。いかにスターリンによる日常の政策が厳しいものであるかを思う。

黒河を後にしてソ連領に入り西に向かった。イルクーツクで、日付は十月終わり頃であつたと思う。場所はイルクーツク市街地とは離れておらず、何か工業団地のある所で、付近は工場が多い所であると感じた。収容所は団地の近くにあり、千人内外が収容され、施設は特別に特室はなく、今になって思えば普通の施設であつたように思える。

抑留地の生活はバイカル湖付近で、収容所の宿舎は広くなかった。各人の作業は入隊前の職業別希望に基づき分けられた。その内容は、工場で機械操作に従事する者、特殊作業（大工、その他）に就く者、一般作業に就く者（農業及び一般労働）等であつた。

第二抑留地はチタ收容所で、ここは広い演習地の一面に收容所があり、周囲を太い丸太で囲み、歩哨が立ち警戒は厳重であった。約千〜千五百人位が收容されていたが、特に変わったことはなかった。

私は、チタ收容所へ移動後は入浴場の任務に就いた。本隊の收容所と離れ、屋外に入浴場があり、その場所に設立。ロシアの指示系統は收容所長と入浴場長は異なる少佐が勤務しており、私達二十五人は入浴場の少佐の下で勤務した。入浴は約一・五カ月に一回位であった。風呂は日本流で、いわばちようど今のサウナ風呂である。下着類の襦袢、シャツは入浴時にソ連側の準備で交換着用する。虱予防のため陰部を消毒した。方法は簡単で筆で薬を塗布した。

労役については、イルクーツク收容所に收容された時は敷地区域の穴掘り作業で、零下三〇度〜四〇度の寒さは厳しくて、立っているだけで編上靴が下駄のように凍ってしまう状態であり、ま

して作業の穴掘りについてはボールでコツンコツンと掘ってやっと深さ三十センチメートル、ノルマにして七〇パーセントである。

コルホーズ農場の作業は、広々とした農場の中に白系ロシアの人が住んで農業をやっていた。住んでいる人は約百人位で、農耕はジャガイモとキャベツをやっており、私達は作業協力であった。特にジャガイモは腹を満たすには好都合で、よく腹の中に入れた。白系ロシア人は非常に好意的で親しみが増した。日本人は頭がよくて優れている、ダモイせずに住んでくれと言われた。

チタ浴場では、收容所から約三百メートル位離れており、屋内勤務のため労働は楽で毎日過ごすのに苦労したと当時を偲んでおる。日常生活は、入浴のない日は一日中暇で、身の振り方に困ったと言える。白樺で麻雀パイ、将棋の駒作りをして過ごしたことが思い出される。

抑留中の生活と極限状態の中で生き延びて帰国できたのは、終戦まで思ってもみなかった酷寒と

餓鬼と敗者としての強制労働の生活の中で、まず必ず祖国日本に帰り肉親に会うという生きる目標を持ったことと思う。日本に帰るという目標を達成させるためには、自分は自分と心に決め、まず体力維持と人には負けないという根性があったからだと考えた。そうしてこれを実行して地獄生活を乗り切ってきたため日本に帰国でき、今日の幸いを受けることができたと感謝の念でいっぱいである。

日本帰還の声はチタ収容所であった。そうして昭和二十二年三月下旬にチタから貨物連結車に乗車して出発し、約十日間位かかって昭和二十二年四月二日に帰還集結地ナホトカに着いた。

ナホトカに着き、船に乗れば日本に帰ることができると思っておるとき、パン工場建設のために約百五十人が残留となり、再び収容所生活が始まった。この時の衝撃は言葉に表すことのできないショックであった。日本に向けて帰る帰還船を眺めて暮らす収容所の生活は身を切られるような

思いであったが、昭和二十二年九月十五日に帰還船「恵山丸」に乗船できた。帰還船に乗船できた喜びは、まずこれで生きて帰国できるという喜びで、この喜びも地獄の生活をしてきた者でなくては味わうことのできない喜びであった。生還できた喜びの中で近づいてくる舞鶴の島影が見え始めた時は、帰還できたという実感が湧き上がると同じ時に、祖国日本の美しさが目にしみ、世界中で日本国ほど美しい国はないと思った。このときは昭和二十二年九月二十日頃であったと思う。

実家に帰ると家族一同仲良く暮らしており、勤務先への復帰を温かく迎え入れてくれ、帰還後のスタートができた。

現在の幸せな生活の中で抑留生活を思い起こすと、終戦時に共に戦った戦友、死亡した戦友、消息不明になった戦友等のことを思い出すとともに、シベリアの凍土の中で眠っておられる戦友達に安らかに眠って下さいと祈りながら、自分自身の幸せを願い、改めて戦友達の安らかな眠りを祈

るのみである。

## シベリア抑留の記憶の一部・

### ブカチャーチャ収容所

愛知県 森 武雄

大正九（一九二〇）年十月二十三日、愛知県一宮市にて生まれる。

昭和十八（一九四三）年十二月、早稲田大学商学部仮卒業。

現在無職。長男夫婦、孫三人と妻の七人家族。

昭和十八年十二月、学徒動員で現役兵として兵庫県加古川の戦車隊（大阪師団）に入隊。

その後、経理部幹部候補生に合格。昭和十九年五月新京経理学校へ入学、同年十月卒業、見習士官となり新京（長春）貨物廠に配属される（満州第一九部隊）。

兵科部隊でなかったため、主として軍属と満人

労働者で軍人は一〇パーセントもいなかったの  
で、他部隊の構成・装備などの状況については不  
明。貨物廠の被服・食糧などの在庫は昭和二十年  
に入ると半減した（南方戦線へ）。特に主食の米  
の不足が目立つようになった。しかし昭和二十年  
五月頃は、大豆、高粱ゴリャンなどの農作物の調達は比  
較的順調であった。

ソ連侵攻は、情報としては直ちに全員に知らさ  
れたが、戦闘部隊ではなかったため部隊の編成・  
配置替えなどは終戦日までなく、侵攻への対応、  
戦闘は一切なかった。

終戦の詔勅は全員（軍人、軍属のみ）営庭に集  
合整列してラジオ放送で聞いた。部隊長の訓辞な  
ど聞いたが全く記憶にない。相当なショックを受  
けたのは事実であったが、七月になってから敗戦  
必至の情報を知っていたので大した混乱はなかつ  
た。満人、朝鮮人による貨物廠内の物資の盗難事  
件（小規模のもの）はあったが、大事件はなかつ  
た。ソ連軍の進駐もなく、平穩無事で命令が出る